

愛のエチュード

吉田とし

COBALT・BOOKS



よしだ・とし

大正14年、静岡県富士市に生まれる。昭和23年、処女作「追憶に君住む限り」を出版。30年より児童文学を書きはじめ、37年第一回NHK児童文学奨励賞受賞の「巨人の風車」、42年小学館文学賞受賞の「じぶんの星」他、多数あり、ジュニア小説としては「青いノオト」、コバルト・ブックスに「ヴィナスの城」「たれに捧げん」「稚くて罪を知らず」「誰かいませんか」「潮がくるとき」「ファイティーン」「愛のかたち」などがある。

愛のエチュード

0393-662047-3041

昭和48年 3月10日 初版印刷 * 定価はカバーに表示してあります

昭和48年 4月10日 初版発行

著 者 吉 田 と し

編 集 株式会社 サン・パブリシテイ

東京都千代田区神田神保町1-29
電話 (294) 2781

発 行 者 陶 山 巖

印 刷 所 中央精版印刷株式会社 錦印刷株式会社

発行所 東京都千代田区
一ツ橋2-5-10 株式会社 集英社 電話 東京(265)代表6111
郵便番号 101 振替 東京 15653番

愛のエチュード

吉田とし

愛のエチュード 目次

*ラブレターの書き方

それは大変だ	11
ネギがついてきた	21
同じ皿の上のパン	28
情報がはいった	41
スペシヤルな異性	50
声のイメージ	62
マジックアイ	72
うその本心	84
ラブレター	96
いわないことば	101

*ラブレターの読み方

おくさん、はダメ

男の背中

こよいは十五夜

花ことばはなに？

目的は金線

鉄と竹

夜の訪問者

事前協議

ちょっと待て

午後のドライブ

非常のとき

ひらめきのあとさき

接吻

風と雨の音

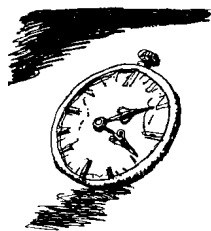
あおい朝

別れのかたち

カ
ッ
ト・
秋
葉
進

ラブ レター の 書 き 方

それは大変だ



なにか鳴った……結城俊は、うつすらと目をひらいた。

しばらく前から、海鳴りに似た音をゆめうつつに聞いていたが、めざめてみると、南側のアルミサッシのガラス戸の外は激しい風雨である。

とこにつくところから吹きはじめた春先の南風は、いつからか雨をともない、いきおいを増しているものらしい。

俊は掛けぶとんの下から手をのばして、まくらもとのスタンドのあかりをともし、スタンドわきの目ざまし時計に目をこらした。

と、キン、コーン……澄んだ金属音がした。玄関のドアチャイムである。時刻は午前二時二十五分。

まさかいまごろ……俊は上半身をおこした。風のいたずらだろう。こんな時間にだれがくるもんか。しかし、風はめずらしく南から吹きつけている。玄関のドアは北向きだから……。

また、キン、コーンと鳴った。最初のも聞きちがいでないとしたら、三回めになる。

俊はこの上に立ちあがった。

片手で電灯のスイッチをひねり、片手で素早くバジャマのボタンをなぜおろして、はずれてないかどうかをたしかめた。それから掛けぶとんのすそにぬぎすてておいたカーディガンをはおった。四度めが鳴った。伊豆の療養所にいる妻の顔がひらめいた。

俊は、ふと、無気味になった。もしや登紀子の病状に急変があつて、あいつのたましいが……俊は思わず口に出していった。

「そんなバカなことはないんだ！」

素足にたたみのつめたさがしみた。

ここは、東京練馬区のはずれにある、八階建てマンションの最上階のへやのひとつだ。あらしの真夜中に人間がおとずれるとしたら、電報配達くらいのものだらう。するとやっぱり登紀子が……。五度め。俊はスリッパをつっかけ、応接間から玄関に出た。スリッパのまま、たたきにおりた。強盗、ということもあり得る。ドアのチェーンはうっかりはずさないことだ。

（しっかりしろ、三十歳の太の男じゃないか！）

俊は腹に力をいれた。

「どなたですか」

ふとい声がでた。

「あのう、夜分すみません」

女だ。俊はドアにはめこんである、直径五ミリほどのマジックアイに目をおしあてた。

あかい、ガウンのようなものを着た少女が立っている。いかにも寒そうに前をふかくうち合

せ、いくらか身をかがめて、ドアの把手とつてのあたりをみつめている。

うちの学生か、と思ったとたんに、指先はチェーンをはずしていた。

俊の本業は、もっかのところシナリオライターだが、渋谷しよやにある女子の短期大学の講師もしている。俊はドアをおしあげた。

しめった夜気が、ひやりと頬ほおにはりついた。

少女はハッとおびえた表情で俊を見あげた。

ひきしまった利口りこうそうな顔つきだが、どうふんでも短大生には見えない。せいぜい十四か十五くらいの年ごろである。

髪はみじかめのおかっぱ。ピンクのネルのバジャマの上に、ウールのあかいガウン。血の気のない頬は総毛そうけ立っていた。

「なんでしようか」

俊は少女の背後に目をはしらせた。だれもない。

「すみません、こんな時間に」

少女はまるめの目をいっぱいにひらいた感じでいった。

「この下の、七階の、七〇四号室に住んでる者で、タキイといします」

八階は俊のすまいを西のはずれにして、南面の家が三軒、西に向いているのが二軒ある。

コンクリートの廊下もカギの手になっていて、東と北のはしは吹きぬけの鉄格子てつこうしだから、風雨の咆哮ほうこうはすさまじいまでに聞こえる。ふつうの声では吹きとばされてしまいそうである。

少女はちょっと顔をしかめて、声を大きくした。

「管理人さんをおこしたんですけど、おきてきてくれないもんで、直接にうかがったんです」

「ぼく結城ですが、なにか……」

「はい、おたくに用事があつて……」

俊は片手でひらいたドアを支えながら、声をやわらげた。

「どうかしたの？」

少女はキッとした目になって俊を見つめた。

「おたく、水を出しっぱなしにしていませんか」

「水？」

俊はなんのことかわからなかった。

「水がどうしたの？」

「落ちてきたんです」

「どこへ」

「父と母のベッドの上です」

「そりゃたいへんだ」

不用意にも俊はわらいかけ、あわてて下くちびるを噛んだ。

「ええ、たいへんなんです」

少女はりきんでいった。

「しかし、ぼくのそこは水なんか出していませんよ」

「うちはおたくの真下にあたるんです」

「そう？ だけど、とにかく水はいま使っていないんだ」

「電気洗濯機とか、おふろばとか、流しとか……」

「そのどこも水の使用はストップしています。だって夜中でしょう？」

「でも、たしかにうちの真上はこちらですから……」

少女はそれまでガウンの両前のあいだに隠れていたほうの手を、さっとつき出した。

「これによりますと、たしかにそうなんです」

これ、というのは、このマンションを売り出したときに、分譲希望者たちが手にいれたパンフレットだ。それには各階の見取り図や五十数戸全部の間取り図がのっている。へやの広さはもちろん、どのへやがいくらであるか、も刷り込んである。

「ほら、いいですかあ」

尻上がりにいいながら、少女は一步俊にふみだして、えんびつをはさんであるページをひらいた。

「ここがうちで、ここがおたくでしょ」

「どれどれ？」

俊はドアを支えたままくびをさしのべた。

「そうですね。たしかにぼくのところはこの図です」

「でしよう？ ところが……ここから水がぼたっぼたっと落ちてくるんです。このへんからです」

少女はえんびつでさし示した。いくらか抗議の口調くちようになっている。

ここへくるまでに家族で話し合ったものらしく、えんびつの線やマル印がうすくついている。

「だからですね、おたくのこのあたりに原因があるんだと思うんです」

「なるほど」

俊は慎重に二軒の間取りを見くらべた。

「水は使っていないとおっしゃいますけど、原因を調べていただかないとこまります。ねむってるところに水が落ちてくるんじゃないや……」

「そうね、水をさされたんじゃない」

「冗談をいってる場合じゃありません！」

少女は俊をにらんだ。

「まあ、ちょっとお聞きなさい。これはうちの間取り図にまちがいないんだが、きみの指摘するこの部分はテラスなんですよ。うちは最上階だもんで、ちょっと前面がひっこんでいてね。サッシの戸はここ、こっちはテラスなんだ」

「テ……へやじゃないんですか、ここ」

「そう」

「……」

少女はえんぴつを持っていた手を、だらりとおろした。

「じゃ、おたくのせいじゃなく……」

「うちの不始末が原因じゃないですね。ひどい降りだから、テラスのどこから雨もりしてるんじゃないのかな」

「うちは、去年の秋、マンションが完成してすぐに引越してきたんです。これまで何度も雨が降っ